工業部会通信

（発行）
かながわ経済新聞合同会社
〒252-0239
相模原市中央区中央3-12-3
商工会館本館１階
※プリントしてご自由にお読みください。

かながわ経済新聞 KANAKEI

ＴＲＹプロジェクト

今年度は視察事業本格化

TRYプロジェクトの渡邊委員長

ＴＲＹプロジェクトは、工業に関連する最先端の企業・工場・研究所の視察事業を担当する。ただ、昨年の緊急事態宣言やコロナ禍の影響で、移動が制限されていることから、活動機会の減少を余儀なくされている。先行き不透明な中で、同プロジェクトを率いる渡邊将文委員長（ＭＥＭＯテクノス社長）はどんなビジョンを描くのか。また、現在のコロナ禍や先行きをどう見ているのか聞いてみた。

ロングインタビュー

渡邊委員長

オンライン採用も検討

「時代の波乗るヒントに」

《コロナ禍の影響が続いています》

「昨年度は残念ながら１回の視察しかできませんでした。しかし、コロナ禍にあっても今年度は何らかの視察をやっていきたいと思っています。確かに、移動が制限されていますが、オンライン視察も選択肢の一つであると思っています」

「具体的には、視察希望の参加者を産業会館など１カ所に集め、そこから視察現場とオンライン中継する。参加者たちが同じ場所で雰囲気を共有することで、自宅から参加できるウェビナーなどとは違った内容になるはずです」

《今年度の重点テーマについて教えてください》

「従来のように、大手企業への視察は継続していきますが、コロナ禍でも業績が左右されない地元中小企業も訪れてみたいです。新型コロナウイルス感染症拡大は、生活のみならず、産業のあらゆる部分も変えました。その一つがデジタル、オンラインの普及です。コロナ以前は、テレビ会議といえば、やっている人たちは少数派でした。ところが、昨年は一気に普及しました。今までの当たり前だったことが、コロナをきっかけに、ものすごいスピードで変わる。そういったことが実感できたと思います」

「中でも、自動車業界ではＥＶ（電気自動車）が急速に普及するでしょう。そう考えると、今までやってきたビジネスが突然通用しなくなる日が来るかもしれません。そうした事態に備えられるよう、視察事業で何らかのヒントをつかんでほしいと思っています」

《昨年は地元産業界にとっても大変な１年でした》

「コロナ禍でよい方向に変わったこともあります。先ほど話したデジタル化です。今までは地方の取引先との打ち合わせは、出張するのが当たり前でした。しかし、今はウエブミーティングで済むようになりました。仕事の効率面は上がっていると思います。一方、コロナ禍で悪くなったこともあります。その一つが、企業の開発スピードだと思います。大手企業はコロナ禍により、予定していた設備投資など、多くを先送りしました。そして、今でもいろいろなことが、手つかずのままです。つまり、コロナ以前の状態のままで、時が過ぎている感じがします。実際、お客さんと会っていても以前のように『あの件どうなった』という話ではなく、『最近どうですか？』という話題ばかりです。ここから戻していくのは並大抵のことではないと思います」

《ポストコロナ、アフターコロナをどう見ますか》

「コロナ禍が落ち着いても、今度は地球環境問題への対応が問われると思います。二酸化炭素（ＣＯ２）削減は全世界共通のテーマであり、日本でも大企業だけでなく、中小企業にも求められています。一方で、私たちものづくり産業は、工場で生産すればするほど、ＣＯ２排出量が増えてしまいます。コロナ禍での失速を巻き返そうと思っても、ＣＯ２排出削減も両立させていかないと非常に厳しくなると思います。そうした中で、私たち中小企業経営者は今後、価値あるものづくりがどのようにできるのか、課題を突きつけられている気がします」

《デジタル化の波が世界中で押し寄せています》

「確かに、ものづくりのデジタル化が進めば、データと工作機械さえあれば、どの国で生産しても、遜色ない製品ができると思います。しかし、ものづくりはアナログが支えていることも事実です。情報機器がどんなに進化しても、例えばネジは絶対に必要です。ネジはアナログなものですが、これから先も、なくならないものです。そんなアナログ技術を持っているのは大手ではなく中小企業です。今後、淘汰は進むと思いますが、生き残ることができたら、希少な存在になるでしょう」

副部会長コラム「工業よもやま話」

経営者に必要な「予見力」とは？

自動車が内燃機関から電気自動車（ＥＶ）へ移行するのが世界の潮流になってきました。１８８６年、内燃機関で走る自動車をダイムラーベンツが作りました。そして20年後、フォードがベルトコンベアー生産方式でＴ型フォードを発売、自動車を安く大量に普及させることに成功しました。

「米国ではそれまで輸送手段とされていた１５００万頭の馬が自動車に置き換わるのに20年しかかからなかった」と、トヨタの豊田章男社長は以前、日本記者クラブで講演しています。

現代において移動手段は、かつての馬から内燃機関車の時代へと移りました。経営者は時の科学技術を知り、情報を集め、何年後にどの位の大きさの産業として育つのかを、感性を発揮しながら想像し、予見する力を付けることが必要です。

「予見力」があればこそ、ヒト・モノ・カネに投資する勇気が湧いてきます。時代の潮流を読むには、科学技術を知ることが必須だと思います。昔は普及すらしなかったＥＶですが、今では蓄電池技術の飛躍的な進展で、長い走行距離にも耐えられるようになりました。二酸化炭素（ＣＯ２）削減に対する気運と相まって、今後もＥＶ化の流れは止まらないと判断できます。とはいえ、既存の自動車生産企業は内燃機関製造で成り立っています。一気に舵を切るのは大変です。

ただ、現実を見ると、ＮＹ株式市場の読みは、テスラモーターの時価総額が66兆円、トヨタは27兆円となっています。自動車はＥＶと自動運転の時代になるものだと、投資家たちは大胆に予測しています。自動車が内燃機関からＥＶに変われば、社会インフラも一変します。

例えば、充電場所は、ガソリンスタンドではなく、家庭や会社に変わります。今月は自動車の話になりましたが、技術革新で大きく変化していく社会をチャンスととらえ、投資行動ができる経営者になりたいものです。（湘南デザインＣＥＯ・松岡康彦）

新規会員募集中

近未来技術研究会

相模原商工会議所工業部会